研究ノート

関西大学バイリンガルエッセイコーパスプロジェクト

── その概要と教育研究への応用に関する展望 ──

Kansai University Bilingual Essay Corpus Project and Prospects for Research and Pedagogical Applications

山　西　博　之　　水　本　　篤　　染　谷　泰　正
Hiroyuki Yamanishi　Atsushi Mizumoto　Yasumasa Someya

This is an interim report of the Kansai University Bilingual Essay Corpus Project currently being undertaken at the Faculty of Foreign Language Studies of Kansai University (KU) by the above authors. The project officially began in April 2012 for the primary purposes of (1) collecting essay data written both in English and Japanese on 13 different topics by the KU students and compiling them into a large-scale bilingual corpus, and (2) analyzing the corpus data from various viewpoints, be they lexical, syntactic, organizational, rhetorical or otherwise, to properly assess and gain insights into the students' linguistic and compositional competences in both languages. The English part of the corpus (ver. 2012) currently contains approx. 650,000 running words, and the Japanese part approx. 1.5 million Kana-kanji characters. The corpus size will be twice as large as that of the current version by the end of 2013. The project also aims to develop an error tagger and a logical/organizational features editor, which the authors believe will be instrumental in otherwise time-consuming annotation work. Some of the research questions the authors plan to pursue in the course of the next phase of the project will also be outlined at the end of this report.

Key words
writing, bilingual essay, corpus, university students

１．はじめに[1)]

関西大学外国語学部では、学部専門英語科目「英語ライティング２」の受講生（3・4 年次生）を主な対象に、2012 年度から「バイリンガルエッセイコーパス・プロジェクト」を開始した。このプロジェクトの目的は、①学生が授業で作成する作文データを電子データ（＝コーパス）として蓄積し、②これをさまざまな角度から仔細に分析評価することで、彼らの英語力の実態やライティングにおける問題点をより正確に把握し、③その成果を本学における英語教育に役

立てようというものである。

本プロジェクトは現在進行中のものであり、まだその具体的な成果を発表する段階にはないが、プロジェクト開始後1年を経て、ようやく上記①のコーパスが形を整えてきつつある。同時に、さまざまな問題点や将来に向けての課題も明らかになってきた。そこで、本稿では、プロジェクトの中間報告を兼ねて、これまでの経過を総括するとともに、期待される成果の教育研究への応用という観点から、本プロジェクトの今後について展望する。

2．授業の概要

関西大学外国語学部の学生は、1年次に必修科目の1つとして「英語ライティング1」という科目で1年間パラグラフライティングやエッセイライティングの基礎を学ぶ。その後、2年次にSA（Study Abroad）制度により英語圏または中国に1年間の留学をし、ライティングに関しては各留学先大学のカリキュラムに従った授業を受ける。SA終了後（帰国後）の3年次には、それまで培ってきた英語ライティングの知識や技能を強化するために、前記の「英語ライティング2」という選択必修科目（英語圏に留学した学生は必修扱い）を1年間履修する。学部発足から4年目の2012年度は、この「英語ライティング2」が開講される2年目となる。開講2年目の2012年度から新カリキュラムに移行する2014年度までの3年間は、学内のプロジェクトのひとつとして、開講される全クラスで統一の講義概要・到達目標を持つコーディネート科目として授業が行われる[2)]。

この授業の講義概要と到達目標、および課題として課される13のトピックは添付資料にあるシラバスのとおりである。ここから分かるように、英文ライティングの基本的に事柄についてはすでに理解されているものとしてシラバスが組まれており、第2回目の授業で重要なポイントのおさらいをしたあとは、学生はひたすら「書く」ことに集中する。エッセイの作成は隔週で行われ、それぞれの翌週には学生が書いたエッセイを通例1つ取り上げ、クラス全員でレビューするという形で授業が行われる。なお、シラバスにも明記されているように、この授業では英語のエッセイだけでなく、同じトピックに関する日本語のエッセイも作成するが、その理由および目的については後述する。

受講生は、専任教員3名と非常勤教員2名がそれぞれ担当する5つのクラスに分かれ（1クラスあたり約35名で、同一曜日時限に並行して開講）、前後期合わせて計30回の授業に出席する。授業はすべてPCの設置された教室で行われ、学生は、授業中に作成した英文および和文のエッセイを、本プロジェクトのために開設された専用ウェブサイト上の掲示板（図1）に投稿する。なお、外国語学部の授業に加え、第3著者が担当する他学部のライティングクラスでも同じ内容の授業を行ない、データを収集している。

いずれの場合も、隔週のライティングセッションについては、毎回90分の授業時間のうち原

則として前半の60分を英文エッセイの作成に、残りの30分を和文エッセイの作成にそれぞれ充てるように指示している。また、各トピックのエッセイの内容については英語・日本語とも同じものとし、書く順番についてはとくに指示がない限り英文→和文の順で書くこと、および「日本語エッセイは英文エッセイの「英文和訳」ではなく、日本語エッセイとして適格かつ自然なものとして作成すること」という指示を与えた。これらの指示はすべて本プロジェクトのウェブサイト上に明記されている（図2）。

2.1　同意書の提出と学習者属性データの取得

当該授業を受講した学生には、前期（春学期）初回の授業において本プロジェクトへの参加に関する同意書の提出を求めた。この同意書の提出によって、学生は授業中に各自が作成するエッセイデータの教育研究目的における使用に同意したものとみなした。同意書には各種の学習者属性に関するアンケートが付属しているが、これに回答するかどうかは任意とした。また、

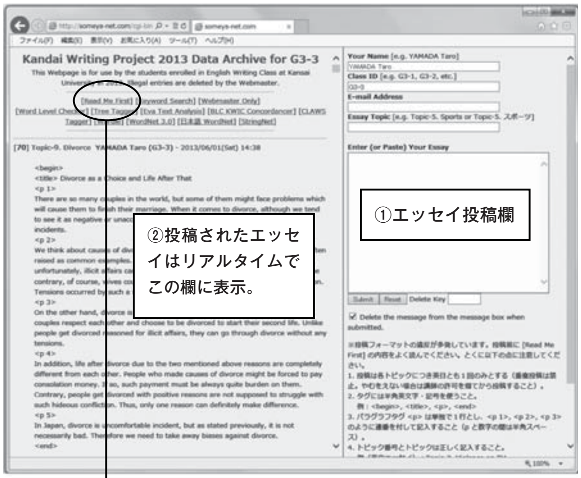

図1　エッセイ投稿用のHTMLインターフェイス
※表示されているサイトは2013年度分のもの（ただし投稿者名は架空のものとした）。

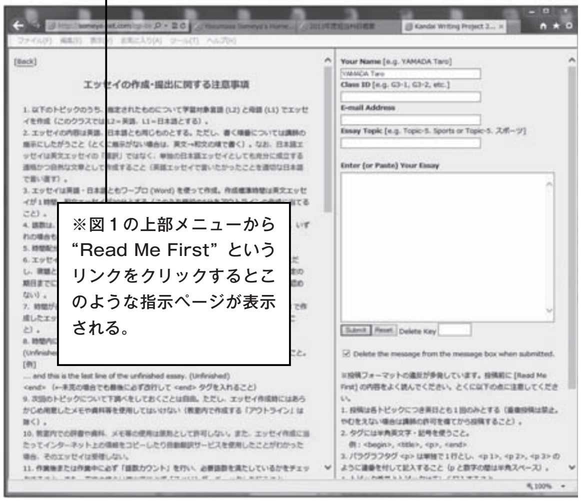

図2　エッセイ作成・提出に関する指示事項のページ

提供された個人情報は個人情報保護法の精神に則って適切に取り扱うこと、および個人が特定できるような形で外部に公表されることはないことを説明した。

同意書内で提供を求めた学習者属性データは、名古屋大学のNICE（Nagoya Interlanguage Corpus of English）プロジェクト（第3節参照）で使用されたアンケートの内容に準じたもので、具体的には、名前、性別、年齢、[大学での] 専攻・学年、英語の資格［TOEFL, TOEIC等の得点］およびその取得年度、英語学習歴、海外滞在・留学歴、他の外国語の学習歴、日頃の英語使用状況、作文を書くことに対する自信度等の項目をカバーしている。なお、2012年度についてはあらかじめ印刷した文書を配布し、これに必要事項を手書きで記入させたが、データを転記する手間や記入エラー等を考慮して、2013年度についてはオンライン上のフォームを使って提出させた。

2.2　ライティングセッション（Essay Writing Session）

前述のとおり、課題文はあらかじめ定められた13のトピックについて、英語と日本語のエッセイをそれぞれ授業時間内にパソコン上で作成し、所定のプロジェクト・ウェブページからインターネット経由で提出する。エッセイの作成標準時間は、英文が1時間（このうち最初の5分をアウトラインの作成に当てる）、和文が30分、語数は英文＝300語以上、和文＝800文字以上を目標語数とした。これはNICEプロジェクトのフォーマットに準じたものである。

なお、2012年度は各クラスともTopic-1から順番に取り組ませていたが、トピックの順番による影響を考慮して、2013年度については前年度の春期分と秋期分を大きく入れ替えたうえで、クラスごとに取り組む順番を変えた（ただし、Topic-12とTopic-13は他のトピックとは性格が異なる課題（argumentative essay）であることから、各クラスともそれぞれ期末に取り組むように固定した)。これにともない、クラスごとのオンラインシラバスを用意した上で、オンラインのエッセイ提出ページもそれぞれクラス別に用意した。

このライティングセッションは、基本的に学生がそれぞれのライティング課題に取り組む時間であり、教員はとくに何かを指導するわけではない。したがって、通常は、適宜モニター画面で学生の作業を巡視しながら、次週に行うレビューセッションの準備や、それまでに提出されたエッセイに目を通しておくなどして時間を有効に使っている。当初は90分間集中力が続くものかどうか多少の不安もあったが、これまでのところ、学生は90分の授業時間中ほぼ例外なく集中してライティング課題に取り組んでおり、各クラスとも授業態度という点ではとくにこれといった問題は報告されていない。

2.3　レビューセッション（Review Session）

レビューセッションでは、前の週に学生が提出したエッセイのうちひとつ（以下、サンプルエッセイ）を選び、これを語彙、文法、文体、構成、内容、および異文化語用論という6つの

観点から見直し、推敲する。クラスごとの指導内容をできるだけ統一するため、プロジェクト初年度の2012年度はTopic-1からTopic-13まで原則として同じサンプルエッセイを使ってレビューセッションを行った。2013年度についてもこのやり方を踏襲したが、後述の［Teacher's Copy］（講師用資料）については、必要に応じて適宜更新し、より詳細なコメントを加えた。なお、学生には第1回目の授業説明のときに1人ずつの細かな添削はしないことをあらかじめ伝えておいた[3)]。

基本的な授業運営方法は、およそ以下のとおりである（授業担当者用に用意した「講師用マニュアル」から一部変更して引用）。

1）毎回の授業で、該当するトピックのサンプルエッセイを人数分コピーし、これを授業の初めに学生に配布（注：課題文は2012年度に使用したものを再利用し、トピックごとに［Student's Copy］と教員用の添削コメント付き［Teacher's Copy］をあらかじめ用意した。［Teacher's Copy］は原則として学生には配布しない）。
2）サンプルエッセイを配布後、20分程度の時間を与えて各自添削をさせる。添削は前述の6つの観点から行わせるが、特に、①構成上の問題点（論理的に構成されているかどうか）および②語彙・文法上のエラーの2点を中心にチェックさせる。
3）学生はこの20分間で課題エッセイについて気が付いたことを紙面上に記入。自分で添削できるところは添削し、何か変だと思うがどう修正したらいいかわからないところは、下線を引くなり疑問符を加えるなりしてマークさせる。教師はこの20分の間に自分でも対象エッセイを細かくチェックしておき、［Teacher's Copy］を参考に、どこをポイントにコメントするかを決めておく。
4）20分経ったら、適宜学生を指名し、添削について意見を発表させる。学生の発表の際に各教員が決めた「今日のポイント」にヒットしたら、そこで少し詳しく説明を加える。この際、学生の意見を求めるなどして、できるだけ一方的な講義にならないように工夫する。
5）最後に、10～15分程度を割いて「振り返りコメント」（Review Comments）を提出させる。「振り返りコメント」は、レビューセッションで気が付いたことや次回のライティングに生かしたいと思ったことを日本語で記入させるもので、原則としてオンライン上のエッセイ提出ページから提出させる[4)]。
6）時間がきたら、配布した資料（［Student's Copy］＝学生の添削が入ったもの）に学生の名前を記入させた上で回収。回収資料は、提出済みを証明するサインを加えた上で翌週の授業で返却（回収資料は各教員がPDF化して保存）する。なお、この際、1人ずつ何かコメントを書き加えて返却するかどうかは各教員の判断にまかせた。

2.4　改訂版エッセイ（Revision）の提出

上述のとおり、本授業は［Writing Session］と［Review Session］を隔週ごとに繰り返すという方式で進行していくことを想定していたため、各学生によるエッセイの提出はトピックごとに1回のみで、これを書き直す機会がなかった。ライティングにおける書き直し機会の重要性については担当講師の間では十分に認識はされていたが、これを実施しなかったのは、もっぱら技術的な問題（現行のオンラインプログラムの仕様上の問題）と教員の労力負担を考慮しての判断であった。しかし、1年間の試行を経て、やはり書き直しの機会を与えることが教育的には望ましいということから、本年度（2013年度）については毎回のエッセイの改訂版を提出させることにした。これに伴い、図1に示したデータ入出力インターフェイスを制御するCGIプログラムを一部修正し、ログデータの整形やエクセルへの流し込み作業による負担を大幅に軽減できるようにした（ただし、現在のシステムでは限界があるため、現在、システムそのものを作成し直している。これについては後述する）。

改訂版は毎回のレビューセッションが終わった日の翌日から、翌週の授業日の前日までの間に、プロジェクト・ウェブページ上に投稿させている。学生には改訂版の提出はオプションではなく、義務であることを明示的に伝えた。

なお、改訂版エッセイの作成に当たっては時間制限なしで、辞書の使用やインターネット上の情報の参照も許可することにした。前述のとおり、本年度は授業中にエッセイを作成する際の辞書や資料（インターネットを含む）の参照を禁止しているが、これによる学習機会の喪失は、自由な環境下での改訂版の作成機会を与えることでカバーできるものと考えている。

以上、本プロジェクトにおけるデータ取集の直接の対象である授業の概要、およびこれまでの経過を簡単に解説した。次節では従来の「学習者コーパス」研究について簡単にレビューしながら、本プロジェクトの特徴について述べる。

3．従来の「学習者コーパス」研究と本プロジェクトの特徴

本プロジェクトは、いわゆる「学習者コーパス」研究（Learner Corpus Research）と総称される分野に属するものである。学習者コーパスとは、「学習者により産出されたテクストを体系的かつ電子的なデータとして集めたもの（systematic computerized collections of texts produced by learners）」（Nesselhauf, 2004）で、研究の方向性として、いわゆる中間言語の研究を通して第2言語習得のメカニズムや普遍的原理を解明しようという動機で行われるものと、学習者特有の誤用パターンや不自然な言語使用、あるいは過剰・過少使用のパターンを特定し、その研究成果を教材開発や言語教育に活かすという教育的な動機で行われるものの2種類に大別することができる。いずれの場合も「データに基づく研究（data-driven research）」である点に特徴がある。

この分野での本格的な研究が始まったのは1990年代で（それ以前は、コーパスといえば母語話者コーパスを指すのが普通だった）比較的歴史の浅い分野であるが、2000年代に入って主として非英語圏に属する研究者を中心に急速に研究が進んだ。現時点での代表的な学習者コーパスとして以下のようなものがある。このうち、1）のICLE以外はすべて国内の研究者による業績である。

1）ICLE（International Corpus of Learner English）
2）NICT JLE Corpus（NICT Japanese Learner English Corpus）
3）JEFLL Corpus（Japanese EFL Learner Corpus）
4）NICE（Nagoya Interlanguage Corpus of English）
5）ICNALE（The International Corpus Network of Asian Learners of English）

ICLEはルーヴェン・カトリック大学（ベルギー）のSylviane Granger教授らのグループが作成した国際英語学習者コーパスで、現在リリースされている第2版（Ver.2, 2009; http://www.uclouvain.be/en-277586.html）には、ブルガリア、チェコ、フィンランド、イタリア、ロシア、中国、日本など16か国にわたるおよそ370万語の作文データが収集されている。これに加えて、比較のための母語話者コーパス（LOCNESS=Louvain Corpus of Native English Essays）も用意されており、いわゆる中間言語研究（あるいはGranger（1998）のいうところの対照中間言語分析Contrastive Interlanguage Analysis）を目的として作成されたコーパスとしては質・量ともに世界最大規模のコーパスである。

NICT JLE Corpus（http://alaginrc.nict.go.jp/nict_jle/）は独立行政法人情報通信研究機構（NICT）が中心となって作成した日本人英語学習者の発話データコーパスで、SST（Standard Speaking Test）と呼ばれるスピーキング能力試験の受験者1281人のデータ（約100万語）を、習熟度別に集めたものである（和泉他，2004）。

JEFLL Corpus（http://jefll.corpuscobo.net/）は東京外国語大学の投野由紀夫教授が中心になって作成した日本の中学・高校生による英作文コーパスで、教室内で実施した20分間の辞書無し自由英作文のデータ（約1万人分／67万語）が収録されている。扱われているトピックは6つで、言いたいことに対応する英語が思いつかない場合は日本語（ローマ字表記と仮名漢字が混在）を使うことが認められている（投野，2007）。

4つめのNICE（http://sugiura5.gsid.nagoya-u.ac.jp/~sakaue/nice/）は、名古屋大学の杉浦正利教授が中心になって作成したもので、2つのサブコーパスから構成されている。1つは日本人学習者（大学生と大学院生）が作成したエッセイからなるコーパス（NICE-NNS）で、約7万語（207名分）のデータが収録されている。もうひとつは比較研究のための統制コーパスとして作成された英語母語話者コーパス（NICE-NS）で、こちらには約11.8万語（200名分）のデータが収録されている。データの規模が小さい点でやや問題があるものの、現在、杉浦研究室を中心にNICEを使った研究が精力的に進められており、現時点ではもっとも成果を挙げ

つつあるプロジェクトの1つである。

最後のICNALE（http://language.sakura.ne.jp/s/kaken.html）は神戸大学の石川慎一郎教授が中心になって推進している国際プロジェクトで、アジア圏の英語学習者の作文データを集めた大型統制作文コーパスである。現在までに100万語を超えるデータ収集が完了しており、世界最大級の学習者コーパスの1つとなっている。なお、データの内訳は日本人学習者のデータがおよそ17.6万語、それ以外のアジア諸国（9つの国・地域）の学習者データが合計約105万語、英語母語話者によるものが約8.8万語である。

KUBECコーパスとの関係

これらの各種学習者コーパスのうち、本プロジェクトで構築している「関西大学バイリンガルエッセイコーパス」（Kansai University Bilingual Essay Corpus: KUBEC）と直接的な関係があるのはNICEとICNALEである。

前述のとおり、KUBECプロジェクトでは1年間を通じて13の異なるトピックのエッセイを作成させているが、このうちTopic 1からTopic 11についてはNICEプロジェクトで使用されたエッセイトピックをほぼそのまま踏襲し、時間制限もNICE同様1時間として、両者の比較ができるようにした[5)]。これに加えて、授業開始に当たって対象学生から取得した各種個人情報の項目・内容についてもNICEで使用されたアンケートのフォーマットを援用している。

ICNALEからはPart-time job（by college students）とSmoking（should be banned at all the restaurants）という2つのトピックを借用した。KUBECプロジェクトのトピックではそれぞれTopic 12とTopic 13に相当する。いずれもICNALEの場合と同様にArgumentative Essayであることを明示した上で、それぞれのトピックについて賛成・反対の立場を明確にするとともに、主張の理由・根拠を具体的に記述するように指示した[6)]。

KUBECコーパスの特徴

このように、KUBECは日本人の英語学習者（大学生）を直接のターゲットとする研究として、⑴ 国内の代表的な先行研究との比較ができるように設計されていること、⑵ 詳細な学習者属性（例えばTOEFLの点数や海外生活歴など）が付属していること、⑶ 単一の学習者グループのデータを集めたコーパスとして世界最大級のものであること（2013年度末までに英文≒130万語、和文≒300万文字の収集を予定）を大きな特徴とするが、その上で⑷ 日本語エッセイと対になった「バイリンガルコーパス」であるという点が、従来のモノリンガルベースの学習者コーパスにはみられない本プロジェクト独自の特徴として挙げられる。

従来の学習者コーパス研究は、学習者のL2データを集め、これを母語話者データと比較したり、母語の異なる学習者間で比較するという方法（対照中間言語分析）で進められてきたが、このような単一言語コーパスによる研究では、対象とする学習者の抱えている問題点が第2言

語学習者に特有の発達的な問題なのか、あるいは学習者の母語能力そのもの（＝基本的な認知能力や言語運用能力、および母語に影響された思考パターン等）に起因するものなのかが必ずしも明らかにされてこなかった。このような観点から、われわれは、従来の単一言語コーパスに代わって、学習者の母語（日本語）によるデータと学習対象言語（英語）の2カ国語からなる「バイリンガルコーパス（パラレルコーパス）」を作成することとした。筆者らの知るかぎり、このような試みは前例のないものである。

また、本プロジェクトで構築しているコーパスには、各学生の「振り返りコメント」（Review Comments）も付属している。「振り返りコメント」は、トピックごとに隔週で行っているレビューセッションにおいて気が付いたことや学んだことを日本語でまとめて提出させるというもので、各学生がどのようなことに関心を持っているか（いないか）、あるいは授業の進行につれてどのように関心が推移していくか（いかないか）、さらには指導の影響や指導内容との相関等を見るための貴重なデータになることが期待される。

4. 現在までに集まっているデータの概要

表1は2012年度の授業で収集したデータの内訳である。この他に提出者不明のエッセイが英文＝13件、和文＝12件あるが、これは集計から除外した。英文エッセイについては総語数約65万語、エッセイ数2,031で、単一ユーザグループを対象としたものとしてはすでにNICEやICNALEのデータ規模をはるかに超えるものとなっている。日本語エッセイについては、総文字数約149万8千、エッセイ数1,958である。エッセイ当たりの平均長は英文が322語（SD＝21.06）、和文が767文字（SD＝37.24）で、前者については目標値を達成できているが、後者についてはやや不足気味である。レビューコメントは原則としてTopic-2からTopic-12について収集したが、クラスによっては授業運営の都合上、レビューコメントの提出ができなかったところもあり、コメント件数はトピックによって大きな変動がある。なお、このほか、秋学期の期末に1年間の授業全体を通じての「振り返りコメント」も収集している。

表2は、本プロジェクトの開始に先立って、第3著者が2010年度と2011年度に担当したライティングの授業で収集したデータの内訳である。エッセイ執筆における統制条件は原則として2012年度分データと同じであるが、2012年度の主たる対象学生が外国語学部3・4年次生（203名）と法学部の2年次生（20名）であったのに対し（このほかに文学部4年次の聴講生1名を含む）、2010年度～2011年度の対象学生は外国語学部1年次生（45名）、法学部2年次生（49名）、経済学部2年次生（1名）、文学部2～4年次生（3名）、社会学部3～4年次生（2名）であり、法学部の2年次生以外は対象学生層が異なっている。

全体のデータ量は、英文エッセイが総語数約17.7万語、エッセイ数688、日本語エッセイが総文字数約39.2万字、エッセイ数656である[7]。エッセイ当たりの平均長は英文が250語（SD

＝21.7）、和文が619文字（SD＝168.06）で、表1のデータと比べると全体に目標値をかなり下回っていることがわかる。これは、前述の対象学生層の違いを反映したものである。

表1　2012年度のデータ内訳（速報値）

		English Essay			Japanese Essay			Review Comment		
Topic No.	Essay Topic	No. of Essay	Total No. of Words	Ave. No of Words per Essay	No. of Essay	Total No. of Chars	Ave. No of Char per Essay	No. of Review Com'nts	Total No. of Chars	Ave. No. of Chars per Com'nt
0	Self-introduction（E3）	17	1,447	85	—	—	—	—	—	—
1	Env. pollution	181	55,246	305	179	129,176	722	—	—	—
2	Violence on TV	163	52,729	323	156	131,875	845	92	17,021	185
3	Young people today	165	59,553	361	174	133,318	766	151	28,052	186
4	Suicide	138	46,041	334	132	102,394	776	80	16,250	203
5	Sports	171	56,387	330	168	133,133	792	79	12,473	158
6	School Education	183	65,220	356	180	142,288	790	112	20,152	180
7	Recycling	163	47,428	291	158	113,753	720	85	14,656	172
8	Money	164	52,087	318	160	118,773	742	92	15,588	169
9	Divorce	146	46,823	321	140	104,220	744	2	102	51
10	Death penalty	146	45,077	309	135	100,846	747	115	20,367	177
11	Crime	97	30,485	314	95	76,324	803	29	5,778	199
12	Part-time Job（Arg）	147	48,071	327	136	107,406	790	44	6,793	154
13	Smoking（Arg）	150	43,798	292	145	105,422	727	1	122	122
	SUM / AVE	**2,031**	**650,392**	**322**	**1,958**	**1,498,928**	**767**	**882**	**157,354**	**163**
	SD			21.06			37.24			41.42

1. 表1は速報値であり、今後修正される可能性がある。なお、Topic-0は練習用に使用したもので、［E3-LAW］クラス（法学部2年次生）を対象に自己紹介文を書かせた。ただし、個人情報が含まれているためプロジェクトのデータからは外している。
2. トピック1から11はNICEプロジェクトにおけるトピックを、トピック12と13はICNALEプロジェクトにおけるトピックをそれぞれ使用した。
3. 英文は60分、和文は30分をそれぞれ制限時間とし、前者については300語以上、後者については800文字以上を目標とし、辞書の使用を許可した。
4. 表中の合計（SUM）、平均（AVE）、および標準偏差（SD）の数値はTopic-0のデータを除外したもの。
5. 上記トピック1から13までのデータのうち、［E3-LAW］クラスのデータ量は以下のとおり。
   英文エッセイ総数＝241；総語数＝57,401；エッセイ当たりの平均語数＝238
   和文エッセイ総数＝101；総文字数＝64,654；エッセイ当たりの平均文字数＝640

表 2　2010－2011 年度のデータ内訳

		English Essay			Japanese Essay			Review Comment		
Topic No.	Essay Topic	No. of Essay	Total No. of Words	Ave. No of Wods per Essay	No. of Essay	Total No. of Chars	Ave. No of Char per Essay	No. of Review Com'nts	Total No. of Chars	Ave. No. of Chars per Com'nt
0	Self-introduction	24	6,181	258	1	854	854	—	—	—
1	Env. pollution	92	22,279	242	87	56,172	646	—	—	—
2	Violence on TV	86	21,544	251	82	52,747	643	—	—	—
3	Young people today	48	12,913	269	45	28,814	640	—	—	—
4	Suicide	48	12,306	256	47	28,477	606	—	—	—
5	Sports	44	10,771	245	44	28,433	646	—	—	—
6	School Education	37	9,719	263	37	22,900	619	—	—	—
7	Recycling	39	8,336	214	39	22,151	568	—	—	—
8	Money	38	9,686	255	38	21,504	566	—	—	—
9	Divorce	40	10,058	251	33	22,845	692	—	—	—
10	Death penalty	34	8,541	251	20	19,603	980	—	—	—
11	Crime	22	4,483	204	59	10,722	182	—	—	—
12	Part-time Job (Arg)	59	17,002	288	57	38,366	673	—	—	—
13	Smoking (Arg)	67	17,289	258	67	39,470	589	—	—	—
15	Reality TV	10	5,866	587	0	0	0	—	—	—
	SUM / AVE	**688**	**176,974**	**250**	**656**	**392,204**	**619**	—	—	—
	SD	20.51		21.70	19.37		168.06	—	—	—

1. 対象は Topic 1 ～ 13（太枠）。エッセイ執筆における統制条件は原則として 2012 年度分データと同じ。
2. 2010-2011 年度についてはレビューコメント（Review Comment）は収集していない。
3. 表中の合計（SUM）、平均（AVE）、および標準偏差（SD）は Topic 0 と Topic 15 を除外したもの。
4. 2010-2011 年度のデータ内訳は以下のとおり。
   外国語学部　1 年次生 45 名※（指定教科書があったため Topic-1，2，12，13，15 のみを収録）
   法学部　2 年次生 49 名　← 2012，2013 も継続してデータを取得（Topics 1-13 対象）
   経済学部　2 年次生 1 名
   文学部　2 ～ 4 年次生 3 名
   社会学部　3 ～ 4 年次生 2 名
   ※ 1 年次の「英語ライティング 1」の授業のうち第 3 著者の授業を履修した学生が対象。2012 年および 2013 年度のデータには、これらの学生が 3・4 年次生として提出したデータが含まれる。

データのエクセルへのインポート

前述のとおり、ウェブサイト上の掲示板から投稿されたエッセイは、すべてログファイル（テキストファイル）としてサーバー内に蓄積されるが、そのままでは「コーパス」としての利用範囲が限られることから、これを所定のフォーマットに従ってエクセルにインポートすること

にした。データがエクセルに一定のフォーマットで格納されていれば、個々の研究者のコンピュータリテラシーに係わらず、利用可能になるからである。

2010年度～2011年度のデータについては諸般の事情からエクセルへのインポート作業をすべて手作業で行った。この作業に院生TA 3名がおよそ5か月を要したため、この間はデータ分析等の作業ができないばかりか、TAの管理やその作業の検証等の付随的な業務に多くの時間を取られてしまうという問題があった。

そこで、2012年度にはデータの入出力を管理するCGIプログラムを一部変更し、大量のログデータを、ごく簡単な手順で、一括してエクセルにインポートすることができるようにした。インポート先のエクセルには、エッセイデータ本体のほかに、およそ66項目におよぶ各種データ属性（データ番号、作成者コード、トピック番号、エッセイの語数、文数、使用語彙レベル分布、リーダビリティ評価、品詞タグ情報等）、および被験者属性（氏名、年齢、性別、所属学部、TOEFL/TOEICの得点、留学経験、英語以外の外国語の学習歴等）の項目が設定されており、エクセルのフィルター機能を使うことで、特定の属性を基準にしたサブコーパスや複数の属性を組み合わせたデータ群を任意に抽出することが可能になっている。図3および図4に、2012年度分のエクセルデータベースのサンプルを示す。

なお、この分のデータについては、現時点では日英とも個々のエッセイの評価はされていない（2010年度～2011年度の分のデータについては次節参照）。また、エラータグ付与等も今後の課題であり、すべての作業が終了するまでには今後、数年が必要と考えられる。

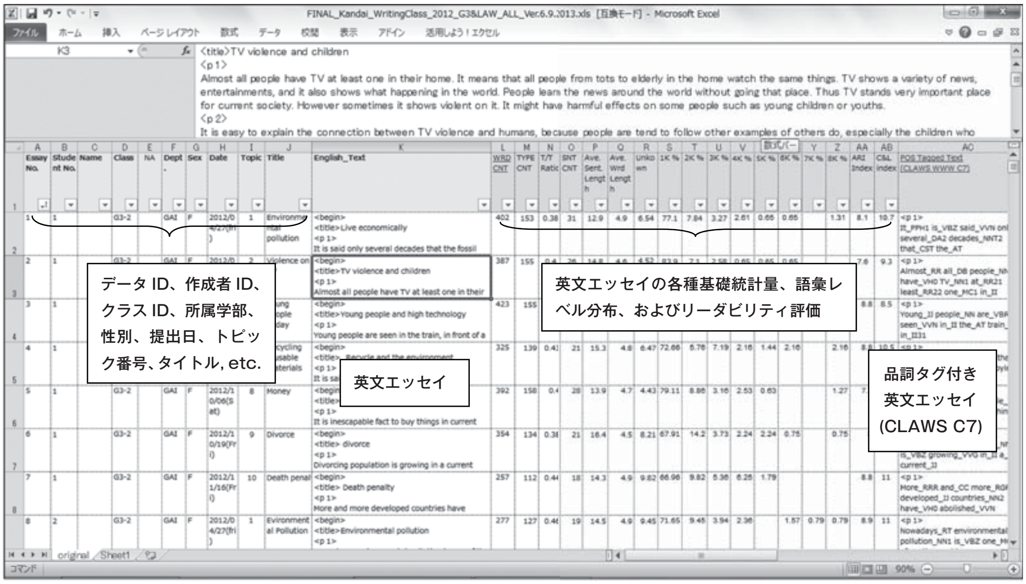

図3　エクセルデータベースのフォーマット（1/2）（抜粋）

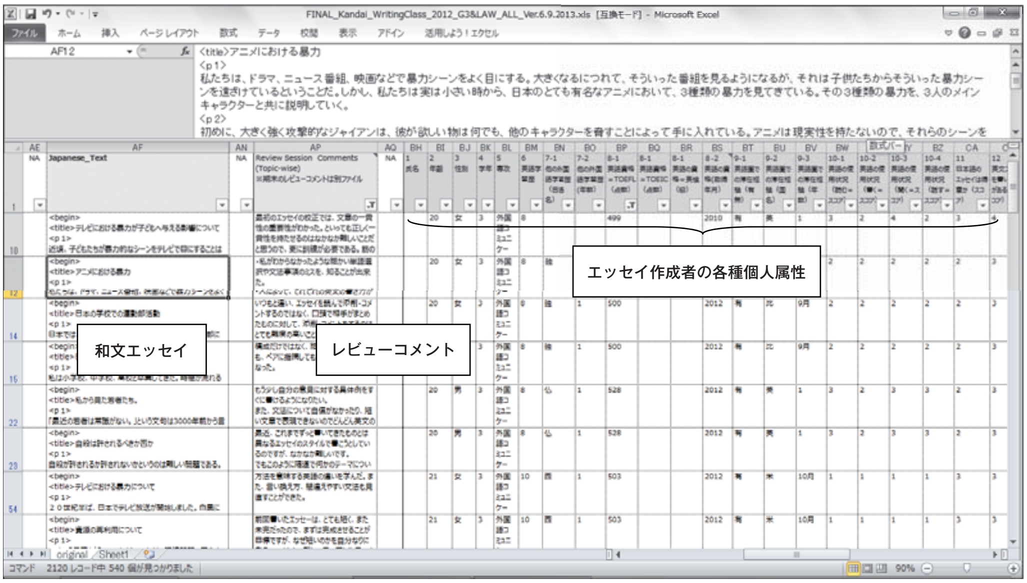

図 4　エクセルデータベースのフォーマット（2/2）（抜粋）

1. 図 3C 欄と図 4 の BH 欄の氏名は非表示。また、図 4 の AG–AM の間のデータ（和文エッセイの語数や文数カウント等のデータ欄、および英文・和文エッセイの各種評価項目欄）は現時点では作業中のため、すべて非表示にした。
2. 2010–11 年度分についても同様のフォーマットでエクセルデータベースを作成ずみ。

エッセイの評価について

これまでに収集したエッセイのうち、2010 年度～ 2011 年度分のデータについては、現時点で約 190 件の日英エッセイについて、英語母語話者と日本語母語話者それぞれ 1 名ずつによる予備評価が終わっており、現在、分析を行っている。評価項目は Overall Quality（総合評価）、Grammar（文法）、Vocabulary（語彙）、Organization（構成）、Content & Idea Development（内容・論点の展開）、Textual Cohesion（結束性）、Mechanics（形式・メカニクス）の 7 つで、それぞれ以下のような評価基準とした。なお、これらの評価項目は主として久留他（2011）を参考にしたものであるが、このうち Overall Quality と Textual Cohesion は本プロジェクト独自の項目である。

Overall Quality: Overall quality of the essay in terms of your first impression (i.e. non-analytical, generic impression), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Grammar: Grammatical competence (i.e. the ability to write grammatically acceptable sentences), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Vocabulary: Lexical competence (i.e. the ability to use a wide variety of words and lexical phrases, and to use them appropriately in a given context from semantic, stylistic and pragmatic viewpoints), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Organization: Organizational competence (i.e. whether the essay has a clear and logical organization), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Content & Idea Development: Topic-development competence (whether the topics and/or main ideas are sufficiently developed, so that the essay as a whole sounds more or less convincing), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Textual Cohesion: Textual competence (i.e. whether such textual or discourse markers as *therefore, however, in addition, first of all, secondly, above all*, etc. are being used properly so that the text as a whole flows rather smoothly and logically), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

Mechanics: Formal and mechanical competence (i.e. spelling, punctuation, paragraphing, etc.), as evaluated by the following scale: 1=Very Poor; 2=Poor; 3=Average; 4=Good; 5=Excellent.

今後、すべてのエッセイについて複数の評価者による評価を加えていく予定であるが、予備評価の暫定的集計結果から、現在のところ次のような問題点が指摘されている（山下，2013）。

1. 評価スケールの基準点が明確でない（→どのようなものが「評価3」になり、どのようなレベルであれば「評価5」になるのか、具体的な例を示すべき）。
2. 現行の5段階の評価スケールでは項目間に有意な差が出にくい（→評価スケールの変更？）。
3. 評価項目間にオーバラップがある。例えば、Content & Idea Development（内容・論点の展開）は、「何を書くか」（what）ということと「どう書くか」（how）という2つの異なった観点が混在しており、後者はOrganization（構成）ともオーバラップする。
4. Textual Cohesion（結束性）は、単に特定の論理副詞・連結詞群の使用を、その頻度と種類で評価するだけなら、コンピュータで自動的に行える。したがって、評価項目に含める必要はない。（頻度と種類だけでなく、その「適切さ」を評価に加えた場合、「論点の展開＝論理性」や「構成」とオーバラップする可能性がある。）
5. Mechanics（形式・メカニクス）は、本プロジェクトのようにワープロを使って原稿を作成し、これを所定のフォーマットに従って提出させる形式の場合は、ほとんど意味のない項目になる。

以上のようなことから、現在、前記７つの評価項目のうち（1）Textual Cohesion（結束性）と Mechanics（形式・メカニクス）を削除すること、（2）Content & Idea Development（内容・論点の展開）を Content（内容）と Idea Development（論点の展開）に分け、その上で後者を Organization（構成）と合わせて新たに Organization & Logical Development（構成と論理展開）とすること、等が検討されている。これによって、評価項目は次の５つになり、評価者の労力の軽減につながるとともに、項目間の曖昧さ（したがって、何を測定しようとしているのかについての曖昧さ）が相当程度解消されることが期待される。

- Grammar（文法）→「語学力」の測定
- Vocabulary（語彙）→ 同上
- Organization & Logical Development（文章構成と論理展開）→「作文能力」の測定
- Content（内容）→「知識・教養レベル」の測定[8)]
- Overall Quality（総合評価）→ 上記の観点を総合した全体的な印象評価

５．今後の課題

以上、本プロジェクトの概要とこれまでの経過（第２節）、既存の学習者コーパス研究と比較した場合の本プロジェクトの特徴（第３節）、および現在までに集まっているデータの概要（第４節）について述べた。本節では、本稿のまとめとして、今後の課題を ⑴ システム上の問題と、⑵ 研究上の課題および展望という２つの観点から整理する。

５.１　システム上の問題と対応策

前述のとおり、本プロジェクトではデータの入出力を独自に作成した Perl CGI プログラムで制御しているが、これまでに次のような問題が明らかになっている。

1. 2012 年度の授業において、１度だけ入力済みのデータが飛んでしまったことがあった。おそらく、データ入力が特定の時間（２限終了時）に集中したこと、および本プロジェクトの開始に伴い、対象とする学生数が 2012 年度から一気に 200 名程度に増えたことから、大学のサーバーに過度の負担がかかったことが原因かと思われる。詳しい原因は不明だが、これは現在の Perl CGI の仕様にも大きく左右されるものと考えられ、今後、同様の問題がいつでも起こり得る可能性がある（現在は、データ損失の被害を最小限にとどめるために、授業ごとに毎回、教員がデータをサーバーから回収している）。

2. 初期のプログラムに比べて大幅に簡素化されたとはいえ、データのインポート作業は依然として手作業に頼るところが多く、担当教員および TA への負担が大きい。また、各種のテクスト属性情報の取得や入力作業もすべて手作業で行っているため、効率が悪く、エラーも発生しやすいことから、将来的にはこれらの作業を可能な範囲で自動化する必要がある。

3. 現在のプログラムでは、ログファイルをデータベース化するための技術的な都合上、学生に対して所定のフォーマットに従ってデータ入力をさせるようになっている。しかし、学生の中にはこのフォーマットを守らない（守れない）ものが少なからずいる。例えば指定の氏名表記方法を守らなかったり、クラス番号やトピック番号を間違えたり、未記入のまま投稿したり、各種の「タグ」（データの開始と終了を示すタグや、パラグラフごとに入力するタグ等）の記入を忘れるという例があとをたたない。現在のところ、こうしたフォーマット上のエラーは教員がいちいち手作業で訂正しているが、将来的には、入力漏れや誤記があった場合、自動的にアラートが出るようにしたり、各種の「タグ」については入力そのものを不要にする（＝システム側で自動的にタグ付与を行う）などの工夫をする必要がある。

これらの問題は、要するに本プロジェクトを円滑に推進していく上で、現行の手作りのシステムには限界があることを示している。このため、現在、学内の「平成25年度教育研究高度化促進費」の支援を得て、専門業者に現行のシステムに代わる、より堅牢なシステムの構築を依頼している。業者との細部の打ち合わせはすでに終了し、本年度の9月には試作版が出来上がる予定である。

図5は、今後、コーパスの構築と並行して開発していく予定の3つのインターフェイス（入力インターフェイス、データ編集インターフェイス、出力インターフェイス）と、それぞれの開発予定時期を示す。上述のとおり、このうち入力インターフェイスについてはすでに開発に取り掛かっているが、Phase 3で予定しているデータ編集インターフェイス[9)]と出力インターフェイスの作成については、今後、科研費を申請して研究に必要な資金の獲得を目指す。

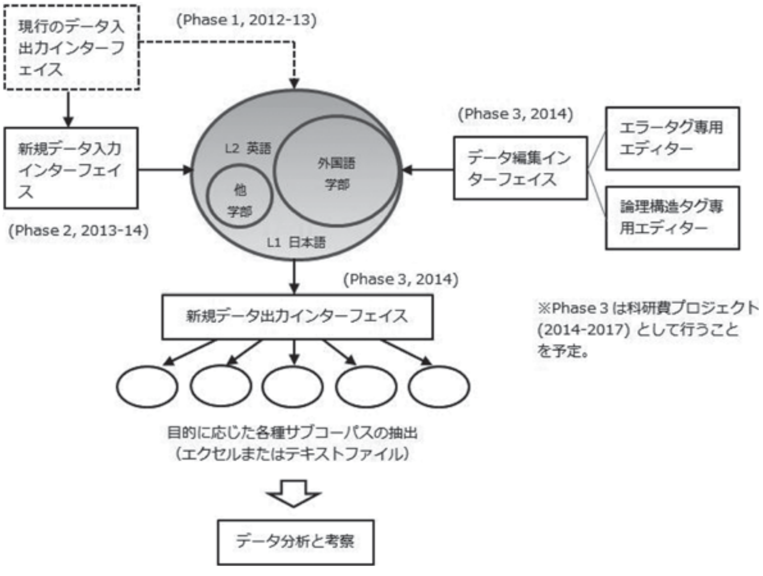

図5　プロジェクトのフェイズと今後の作業計画概要

なお、上記のようなシステム作りは、あくまでも研究を進めていくための手段に過ぎない。より本質的な問題は、そのようなシステムが出来上がった後、これを使ってどのようなことをしていくのかということである。以下、この点について現時点での課題および展望を述べる。

5.2　研究上の課題と展望

前述のとおり、本プロジェクトは学習者コーパス分野の先行研究のうち、NICE と ICNALE の２つをその直接の比較モデルとしている。このほか、参照すべき先行研究として ICLE およびそのサブコーパスである LOCNESS がある。これらを対照コーパス群１（学習者コーパス群）とする。ただし、よりバランスのとれた比較研究（とくに NS-NNS 比較）を進めるためには、このほかにいわゆる一般英語（および日本語）を収録した母語話者コーパスが必要である。これを対照コーパス群２とする。このうち、英語コーパスについては、現時点では BROWN, LOB, FROWN, FLOB（合計 400 万語）に加え、TIME Corpus の使用を考えている[10)]。日本語コーパスについては、現在、検討中である。図６に、関大バイリンガルエッセイコーパス（KUBEC）と対照コーパス群の相関図を示す。

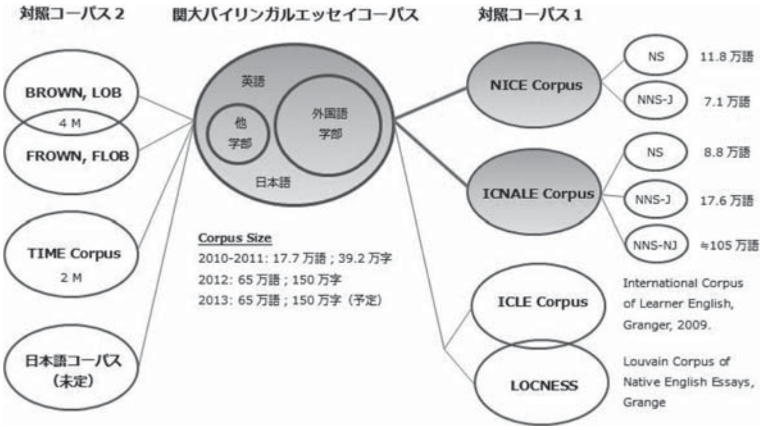

図６　関大バイリンガルエッセイコーパスと対照コーパス

前述のとおり、KUBEC はすでに Phase 1 でのデータ収集を完了し、プロジェクト開始以前に収集したものを含め、現時点で英文およそ 82.7 万語、和文 189.2 万字のデータが使用可能となっている。したがって、基礎的な分析作業はいつでも開始できる状態にあり、現在、少しずつ作業を進めつつある。現在のところ、われわれが関心を持っているリサーチクェスチョンは以下のようなものである（エラー分析、論理構造分析については Phase 3 で予定している専用エディターの開発を待って行う予定）。

［**語彙に関して**］

- 外国語学部の学生の語彙力（ライティングにおける使用語彙）はどの程度のものであるか。
- 誤用を含めて、彼らの語彙使用にどのような特徴や傾向がみられるか（特に、コロケーション、動詞、法助動詞、モダリティ副詞、評価的形容詞、および論理連結詞等の習得度および運用能力）。
- 学生の語彙レベルとTOEIC/IELTS等の得点の間に有意な相関がみられるか。
- 1年次から3年次の間に語彙の面でどのような進歩や変化がみられるか。
- 辞書使用の有無によって使用語彙にどのような違いがみられるか（→2012年度データと2013年度データの比較）。
- オンライン辞書の使い方にどのような特徴や傾向がみられるか（→画面キャプチャーデータの分析）。

［**文法・統語法に関して**］

- どのような文法的カテゴリーに多くエラーがみられるか。
- カテゴリーごとの文法的エラーに一定のパターンがみられるか
- そのようなエラーやエラーのパターンは外国語学部の学生に特有なものか、あるいはその他の学部や他大学の学生、または日本人学習者全体に共通するものか。日本人以外の英語学習者と比較した場合はどうか。
- 各種文法カテゴリーの習得度から、一定の習得順序を想定することが可能か。
- どの程度の統語的多様性（構文上のバラエティー）が習得されているか。また、構文上の選好パターン（好んで使われる構文）がみられるか。
- そのようなパターンから、構文上の習得順序を想定することが可能か。

［**作文能力について**］

- 英文と和文のエッセイ評価に、何らかの相関関係がみられるか。見られるとすればどの項目が最も高い相関を示すか。
- 学生の書く英文および和文エッセイには、どのような文章構成上および修辞上の特徴がみられるか（→マクロな特徴とミクロな特徴）。
- 英文エッセイ（および和文エッセイ）について、NS評価者が「問題あり」と判定する箇所にはどのような特徴やパターンがあるか（註：NS評価者による「文章構成と論理展開」のエラー評価は、現在のところ、評価者が「問題あり」と感じた箇所を＜！＞＜‼＞＜!!!＞のようなタグでマークする方法で行うことを考えている［！の数は問題の深刻さを示す］。NS話者による訂正・書き換えは原則として行わない）。
- 英文および和文エッセイのライティングプロセスにどのような特徴や傾向がみられるか。英文と和文でとくに異なるパターンが観察されるか（→画面キャプチャーデータの分析）。
- これらの特徴や傾向はTOEFL/IELTSの得点、およびその他の学習者属性と何らかの相関

がみられるか。
- 英文エッセイ中にどのようなL1干渉（またはL1干渉と想定される現象）がみられるか。
- 和文エッセイ中にどのようなL2干渉（またはL2干渉と想定される現象）がみられるか。
- 「文章構成と論理展開」に関して、授業の進行につれて何らかの具体的変化や改善がみられるか。
- メタ言語的能力にどのような発達がみられるか。

［エッセイ評価について］
- 汎用性重視の既存の枠組みではなく、アカデミックなトピックに関する英文エッセイ・和文エッセイを評価するための新たな枠組み（評価表、ルーブリック）の開発。
- 大量のエッセイを評価するためのエッセイ自動評価の可能性（Coh-metrix等のプログラムを用いた検討）（水本，2012）。

［学生の意識について］
- 「振り返りコメント」に見られる学生のライティングに対する意識（→ KH Coder等のプログラムを用いた分析。例えば、どのようなことに関心があり、これが授業の進行につれてどのように変化するか／しないか）。

これらのリサーチクェスチョンに答えるための研究は、プロジェクトメンバーが随時進めていくことになるが、これらのことが明らかになった際の、教育研究における期待される成果および今後の展望は以下のようなものである。

まず、得られた知見を生かした、本学の外国語学部および共通外国語科目の英語授業におけるより効果的なライティング指導実践が挙げられる。具体的には、本プロジェクトで作成するコーパスとそれを管理するためのインターフェイスやデータベースといった成果物により、継続的・発展的に本学学生のデータを収集し、その結果に応じた適切な指導のあり方を検討することが可能になる。そして、より発展的な展開として、本学の学生を対象とした、アカデミックな日英作文における能力記述文（Can-Do Statements）の策定やライティングセンターの設置が挙げられる。能力記述文の策定によって、より客観的な形でライティング能力の発達を検証することが可能になる。このような能力記述文に基づいた指導を行う拠点としてのライティングセンターの設置により、より組織的にアカデミックなライティング能力の育成が可能になる。さらには、国際的な規模の「日英バイリンガル・ライティングセンター」構想も視野に入れることができる。

6．まとめ

以上、「関西大学バイリンガルエッセイコーパス（KUBEC）」プロジェクトの中間報告とし

て、その理念と概要を述べてきた。これまで概ね順調に進展していると思えた本プロジェクトも、今回概要を改めて整理することで、新たに解決・検討すべき課題が見いだされた。本稿で確認された課題を解決しつつ、今後の展望で述べた教育研究上の知見を得るため、プロジェクトを進展させていきたい。

謝辞

本稿で紹介したプロジェクトは、関西大学の平成25年度教育研究高度化促進費（研究代表者：山西博之）の補助を受けて行われているものである。また、本プロジェクトの実施に当たっては、関西大学外国語学部長、竹内理先生はじめ、多くの同僚の先生方のご支援・ご協力をいただいている。ここに記して感謝の気持ちとしたい。なお、2012年度のプロジェクトメンバーは以下のとおりである。山西博之（関西大学外国語学部）、水本篤（同）、染谷泰正（同）、妻鳥千鶴子（同・非常勤講師）、菅井康祐（同・非常勤講師）、山下美朋（関西大学外国語教育学研究科博士後期課程院生）。

註

1）本稿は第3著者が草稿を書き、これに第1および第2著者がそれぞれ適宜、加筆修正を加えた上で、全体を第1著者がまとめ直したものである。なお、第2節の前半部は山西（2013）をベースにした。

2）したがって本プロジェクトでは2012年度～2014年度までの3年間のデータを収集することになるが、これに先だって第3著者が2010年度～2011年度に担当したライティング授業のデータが、英文≒17.7万語、和文≒39.2万字分ある。詳細は本文中の表2参照。

3）現在は1クラス平均35名（最大41名）という比較的大きなサイズで授業を行っているため、個人ごとの添削は講師への負担が過重になり、現実的ではないというのが主たる理由であるが、これまでの研究からも明らかなとおり、個人添削、とりわけ文法的訂正の効果については否定的な意見も多く（Truscott 1996）、教師が時間をかけて細かく添削をしても、必ずしもそれに見合った効果が上がるわけではない。ただし、Ferris（1995, 2004）が主張するとおり、教師による「適切なフィードバック」は学習者の成長を促進するための重要な手段のひとつであり、本授業でもレビューセッションという形で文法、語彙、論理構成、内容等にわたる全体的なフィードバックを与えている。また、2013年度からはレビューセッションの後、翌週の授業日を期限に改訂版を提出させている。その効果については今後の検証に待たねばならないが、現時点での感触としては、より効果を挙げるためには⑴学習者のレベルに応じたクラス編成を行うこと、⑵扱うトピック数をいまより少なくし、ひとつのトピックついて初稿、第2稿、最終稿のように3回程度の書き直しの機会を設け、それぞれに個別のフィードバックを与えること、および⑶上級クラスについては10名（から最大15名）程度の少人数編成とした上で、個人添削を中心にしたよりきめ細かな指導を行うことが望ましいと考えている。

4）ただし、2クラスについては教員の判断で関大インフォメーションシステム上の［CEAS］を使って提出させた。→「振り返りコメント」の暫定的な分析結果については山西（2013）参照

5）ただし、2012年度のKUBECプロジェクトにおいては辞書の使用を許可した。教育的観点からす

れば辞書の使用を一律に禁ずるのは好ましくないとの判断によるものであるが、一部の学生に辞書を過剰使用するものや、オンライン資源についてわれわれが予測しなかった使い方（例えば日本語の文章をGoogle等の翻訳エンジンに渡して、その結果をそのまま引用するなどの例）が見られたため、2013年度については辞書の使用を禁じることにした。ただし、授業中の辞書およびオンラインレファレンスの使用を禁じる代わりに、毎回のエッセイの改訂版を、授業後に、時間制限や辞書使用の制限なしに作成・提出する機会を与えた。これは結果的に次の3つの利点をもたらすものと考えられる。1）レビューセッションでの学習成果を反映させることができる、2）時間制限なしに書く自由を与えることで、個々の学生に本来の力を発揮するチャンスを与えることができる。3）前年度のデータと比較することで、辞書使用の有無による違い（特に語彙に関して）を観察することができる。

6）なお、ICNALEではこの2つのトピックに関するエッセイをそれぞれ20～40分（合計40～80分）で書かせているが、KUBECプロジェクとではNICEの課題（Topics 1～11）に合わせて1つのエッセイの時間制限を60分とし、1回の授業で1つのエッセイを作成させた。また、目標語数もICNALEの200～300語に対して、300語以上とした。したがって厳密な意味ではこの両者の作文条件は異なっており、単純な比較はできないということになる。

7）この中には2012年度と2013年度の3・4年次生の一部が同一のトピックで1年次に作成したエッセイデータ（45名分）が含まれており、対応するデータを比較することで彼らの経年変化が観察できるものと期待される。

8）Content（内容）は、文章の構成や論理展開とは別に、書かれている内容が大学生としてふさわしいものになっているかどうか（whether the essay has the contents that are sufficiently mature and/or appropriate as something written by college students.）について評価する。

9）なお、データ編集インターフェイスは、現在のところ⑴文法・語法上のエラーをマークするための専用エディターと、⑵エッセイの論理構成にかかわる諸問題をマークするための専用エディターの2種類の開発を考えている。

10）BROWNとLOBはそれぞれ1960年代のアメリカ英語およびイギリス英語100万語を収録したもので、FROWNとFLOBは1990年代のデータを同一のスキームで同じく100万語ずつ収録したものである。TIME Corpusは1992年に発行されたTIME誌の全データを収録したおよそ200万語のコーパスである。本プロジェクトで扱っているエッセイトピックは、環境問題や教育問題、死刑制度、喫煙の是非など社会性の強いものが多く、しばしば新聞や時事雑誌の話題として取り上げられる類のトピックであることから、TIME Corpusを対照コーパスの1つとして使用するのはそれなりに整合性があるものと思われる。

引用・参照文献

Ferris, D. (1995). Student reactions to teacher response in multiple-draft composition classrooms, *TESOL Quarterly, 29*, 33–53.

Ferris, D. (2004). The “grammar correction” debate in L2 writing: Where are we, and where do we go from here? (and what do we do in the meantime…?), *Journal of Second Language Writing, 13*, 49–62.

Granger, S., Dagneaux, E., Meunier, F., & Paquot, M. (2009). *International corpus of learner English*, v2 (Handbook + CD-ROM), Presses universitaires de Louvain, Louvain-la-Neuve. (ISBN: 978-2-87463-143-6)

Granger, S.（1998）. *Learner English on computer*, Longman Pub Group. 邦訳：船城道雄・望月通子監訳（2008）『英語学習者コーパス入門：SLAとコーパス言語学の出会い』研究社出版.

Nesselhauf, N.（2004）. Learner corpora and their potential for language teaching. In Sinclair, J. M.（Ed.）（2004）. *How to use corpora in language teaching*（pp.125–152）. John Benjamins.

Truscott, J.（1996）. Review article: The case against grammar correction in L2 writing classes, *Language Learning, 46*, 327–369.

和泉絵美・内元清貴・井佐原均（編）（2004）.『日本人1200人の英語スピーキングコーパス』アルク.

久留友紀子・大年順子・正木美知子・金志佳代子（2011）.「EFLライティング・ルーブリックの検証：授業での運用を通じて」『JACET関西支部ライティング指導研究会紀要』第9号，13–24.

水本篤（2012）.「英文解析プログラムから得られる各種指標を使ったテキスト難易度の推定：教材作成への適用可能性」『外国語教育メディア学会（LET）関西支部メソドロジー研究部会2012年度報告論集』，142–150.

投野由紀夫（2007）.『日本人中高生一万人の英語コーパス：中高生が書く英文の実態とその分析』小学館.

山西博之（2013）.「バイリンガルライティング授業に対する学生の認識：「振り返りアンケート」のテキスト分析結果から」『JACET関西支部ライティング指導研究会紀要』第10号，57–62.

山下美朋（2013）.「関西大学バイリンガルエッセイコーパスの評価結果（暫定版）に関する考察」未刊行研究ノート.

添付資料　授業シラバス

2013年度シラバス

学部・研究科	外	時間割コード	
科目名 サブテーマ	英語ライティング２ a/b （英文ライティング・ワークショップ）	授業形態/単位	春秋各２
		クラス	
担任者名	染谷泰正 (1組), 水本篤 (2組), 山西博之 (3組), 妻鳥千鶴子 (4組), 菅井康祐 (5組)	曜日・時限	金曜２限

講義概要	授業題目：英文ライティング・ワークショップ 本授業では1年を通じて大量の英文を書き、これまでに培った英文ライティング力にさらに磨きをかけていきます。基本的には、①最初の授業で英文ライティングの基本的な枠組みについて復習し、②その後、2週ごとに指定のトピックについて英語と日本語でそれぞれエッセイを作成、これを次の週に語彙 (word choice)、文法 (grammar)、文体 (style)、構成 (organization)、内容 (contents)、および異文化語用論 (intercultural pragmatics) という６つの観点から見直し、推敲する、というスタイルで進行していきます。課題文はすべてパソコン上で作成し、インターネット経由で提出します。なお、作成標準時間は英文が１時間、和文が30分、語数は英文＝300～500 語、和文＝800～1200 字を目標語数とします。エッセイはいずれも教室内で、所定の時間内に作成し提出しますが、授業の進行状況によって宿題として課されることがあります。 【到達目標】与えられたトピックについて、論理構成、文法的正確さ、および異文化語用論的な諸問題等に十分に注意を払いながら、所定時間内に 一定語数以上の英文を作成できるとともに、作成した英文を客観的に見直し、必要に応じて適切に推敲できるようになること。
講義計画 染谷泰正 (G3-1) 水本篤 (G3-2) 山西博之 (G3-3) 妻鳥千鶴子 (G3-4) 菅井康祐 (G3-5)	[春期] ※以下は標準モデルです。クラスごとの予定は左記のリンクをクリックしてください。 01.　[1] Introduction to the course, [2] Online Consent Form, [3] Reading assignment 02.　[1] Introduction to Essay Writing, [2] Generalized Models of Essay Writing, 　　[3] Useful Linking Words and Phrases (Optional exercise: Analysing a one-paragraph essay by a student) 03.　Topic 1. Environmental pollution (Topic 1. 環境汚染について) 04.　Review 05.　Topic 2. Violence on TV（Topic 2. テレビにおける暴力について） 06.　Review 07.　Topic 3. Young people today (Topic 3. 最近の若者について思うこと) 08.　Review 09.　Topic 4. Suicide (Topic 4. 自殺について) 10.　Review 11.　Topic 5. Sports (Topic 5. スポーツについて) 12.　Review 13.　Topic 6. School Education (Topic 6. 学校教育について) 14.　Review 15.　Term-end Review [秋期] ※以下は標準モデルです。クラスごとの予定は左記のリンクをクリックしてください。 01.　Topic 7. Recycling reusable materials (Topic 7. 資源の再利用について) 02.　Review 03.　Topic 8. Money (Topic 8. お金について) 04.　Review 05.　Topic 9. Divorce (Topic 9. 離婚について) 06.　Review 07.　Topic 10. Death penalty (Topic 10. 死刑について) 08.　Review 09.　Topic 11. Crime (Topic 11. 犯罪について) 10.　Review 11.　Topic 12. Part-time Job (Topic 12. アルバイトについて) 12.　Review 13.　Topic 13. Smoking (Topic 13. 喫煙について) 14.　Review 15.　Term-end Review 【授業時間外学習】 隔週の課題のための準備および復習に授業時間とほぼ同等の時間を費やすことが求められる。
成績評価の方法・基準	【方法１】７．定期試験を行わず、出席・レポート・平常試験など（平常成績）で総合評価する。 【方法２】課題の提出状況 (50%) 、提出物の内容 (30%) 、授業への貢献度（20%） 【基準】評価はすべての課題が提出されていることを前提とするが、原則として全体の１／３またはこれを超える未提出物がある場合は、その理由にかかわらず単位認定の対象にならない。
教科書	教科書は使用しない。課題文および各種指示等はすべて本授業専用のウェブサイト上に掲載する。ウェブサイトへのアクセス方法は第１回目の授業で指示する。
参考書	[1] Keith S. Folse, Elena Verstri Solomon, and David Clabeaux, *From Great Paragraphs to Great Essays*（Second Edition), Heinle Cengage Learning. [2]『オックスフォード実例現代英語用法辞典（第３版）』マイケル・スワン著　吉田正治訳　研究社 [3] 「パラグラフライティングの技法とエッセイの構成法」 染谷泰正（出典：「ライティングマラソン」第4巻第15週テキストより抜粋 pp.121-176）アルク 1986 (v1), 1994 (v2) [4] このほか、授業中、必要に応じて指示する。
備　考	授業は毎回定刻どおりに開始するので、必ずそれまでに着席し、パソコン立ち上げ等の準備を済ませておくこと。遅刻しての出席は授業進行の妨げとなるため、やむ得ない理由がない限り許可しない。